



明治太閤文學講話

高須芳次郎著

新潮社版

定價壹圓九拾錢
郵送料十四錢

明治 昭和 大正 文藝學講話

昭和八年九月廿五日印刷
昭和八年九月廿八日發行

著者 高須芳次郎
發行者 佐藤義亮

東京市牛込區矢來町

發行所 新潮社

電話牛込

振替(東京) 一七四二番

八八八八八
〇〇〇〇〇〇
九八七六五
番番番番番

富士印刷株式會社印刷

東京市小石川區江西戶川町

序

明治・大正・昭和を通じて、約六十餘年に亙る文學を考察し、これを輦合大觀して一つに纏めることは、非常にむづかしい仕事である。その進歩の著しい點と複雑多端な點とに於いては、優に江戸三百年間の文學に匹敵するであらうと思ふ。従つて、その全き考察及び鑑賞は、これを後世の文學史家に俟たねばならぬが、差當り、その先驅として、以上七十年にちかい文學の史的考察を發表することは、相當、意義あるものと信ずる。

それについて、一言して置きたいのは、本書に於ける私の態度、精神である。態度の上で、文學史家が公平無私であるべきことは、當然であるが、いかに公平を心がけ、無私を原則としても、そこに著者の主觀があつてから倒映することは避け難い。それは私の上に於いても亦免れ難いことではあるが、始終、公平無私を主眼として、ペンを執つたことは事實である。思想上に於いて、私の立場と反對にゐる作家に對しても、また趣味嗜好の上で、私の嫌惡に價する作者に對しても、私は、つとめて私情を抑制して、公平にその人の

眞價を認識することを心がけた。これは、評論家、思想家、學者に向つても、矢張り、同じであつて、そこに私情を挟むことを極力、避けた。

現在、唯物史觀を標榜して、現代文學史を書き、或は明治時代の文學を評論する人々もあるが、さうしたことは、一つの試みとしてよいかも知れないが、始終、イデオロギイのために支配せられ、行き届いた鑑賞批判を爲すことが出来ない。それは、唯心史觀の場合でも、略ぼ同様の缺點に陥ることを免れないと思ふ。唯一方が唯物、他方が唯心の上に力點を置く丈けの相違を見るのみである。

私は、唯物・唯心を統制してゆく生命史觀に起つことを以つて妥當なりとする。物質にしても、物質それ自身、獨立して存在するのではない。精神にしても、精神それ自身、獨立して働きを爲すのではない。何れも、その底を一貫して流るゝ大生命力の支持によつて、始めて、その存在、本質を確保するのである。人間の歴史も、一切の文化も、これを公平に見ようとするには、物心二面を統合して、これを有機的に正しく統制してゆく生命觀に立たねば、不可能だ。即ち生命史觀こそは、中正の意義に徹した見方である。私の信ずる

哲學上の立場は茲に存する。

次ぎに作品・評論を鑑賞批判するに當つて、たゞその技巧のみを是非する傾向が、大正以來、益々ひどくなつて來てゐるが、それは、矢張り、内容の上にも注意を十分に拂ふべきで、技巧本位に一切を批判することは、妥當を缺くといはなければならぬ。技巧内容共に、相對的價值を有する以上、内容の上にも考察を加へて、その價值を正しく認めるべきである。

以上の意味で、本書は、今日、行はるゝ月評などの行き方によらず、技巧と共に、内容を考査することに力めた。例へば、技巧の點に於いて、到らぬところがあるとしても、内容上、相當、優越點を持つ作品・評論に向つては、頭から技巧上の非難を加へることをせず、その内容が持つ意義に言及し、これに對しては、ある程度の價值認識を爲すこととした。同時に、内容的に意義乏しく、左程、魅力を有せぬものも、技巧の冴えを示してゐる場合は、これを認め、且つ推奨するのを躊躇しなかつた。これ又、力めて公平の態度を執ることを心がけた結果にほかならない。

それから誰もが氣付く現象ではあるが、大正後半期から昭和の今日にかけて、文學上の流派が多岐になり、作家の數が明治時代に數十倍することである。その一々に互つて、周到に人及び作品を考察することは、普通の人間業では、五十年を費しても、むづかしい。たとひ、その中から、各派の代表者や目ぼしい人々を中心にして、考察するにしても、二十年や三十年は、費さねばならない。私は今度、等身以上とても云ひたい諸家の全集、選集、單行本、目ぼしい雜誌などを前にして、ペンを執る毎に、そのあまりに複雑多端なことに驚嘆し、つゞいて、これをどう纏めるかについて、ひどく頭を悩まして、幾度も、幾度も、ペンを投じ、茫然自失したことがあつた。

結局、これは一つの大きい冒険であるとさへ考へた。が、複雑多端の現象を成るべく單純化して、これを組織付け、體系付けることに力めた結果、兎も角、不行屆きがあり、手落ちがあるにもせよ、比較的、公平にちかいと思はるゝ現代文學史を作ることが出來たわけである。

翻つて思ふに、現代の日本文學は、明治初年以來、ずつと、歐化的傾向を辿つて來た。

ヨオロッパに於ける文學及び思潮を考へなくては、現代日本文學の正しい解釋が出来ないと云つた有様で、昭和の今日も、矢張り、歐化の一路を歩むことを忘れない人々も、少くはない。

が、最早、日本文學も、獨立して、その本來の面目を發揮しなくてはならない時期に到達してゐる。世界大戰後のヨオロッパ文學は、種々の事情のために次第に衰へ、最早、積極的に他へはたらしかけるだけの立派なものが、次第に出なくなつてゐる。一方、日本では、國民精神の目ざめがいちじるしくなり、それにつれて、日本中心主義、大アジア主義の叫びが力強く起りつゝある。今こそ日本文學は、その純正な本質に立ちかへり、そこから、創造の一路へと邁進すべきだ。私は、一面かうした心持を以て、本書を執筆したのである。

以上述べて來た諸點について、各方面の人々の指導及び注意を得て、足らぬところを補ひ、到らぬところを増修し、更にこれを完全に近いものと思ふ。こゝに謹んで大方の示教に俟つ次第である。

尙ほ本書を著述するについて、畏友佐藤義亮氏（新潮社長）が始終、著者に厚意を寄せられたことを感謝する。

昭和八年九月

高須芳次郎

目次

第一 新文化の世紀及び新文學の世紀(明治・大正・昭和時代)……………三

(一)新文化の源流と文學 (二)西歐文學の影響 (三)日本文學の傳統及びその影響 (四)國民の進歩と文化進展 (五)文學的進歩の第一期及び第二期 (六)文學的進歩の第三期 (七)文學的進歩の第四期 (八)文學的進歩の第五期

第二 啓蒙運動と黎明前の文學(明治初期)……………三九

(一)空前の大改革と歐米文化の流入 (二)英米功利思想の鼓吹者 (三)啓蒙運動の展開 (四)混沌期の文學と其の新傾向 (五)新興の翻譯文學 (六)政治小説の流行

第三 黎明期の思潮及び新文學の生誕(明治初期)……………六四

(一)歐化運動と思想界の新形勢 (二)明治文壇の曉鐘 (三)人生派の藝術と其の先驅者 (四)評論界に於ける新人の群 (五)初期藝術派の作品及び作家 (六)尾崎紅葉を中心として

第四 新文學展開の種々相(明治中期)……………七三

(一)理想派作家としての露伴 (二)森鷗外一派と『文學界』の人々 (三)江戸系統の作家と傳奇派の作品 (四)藝術的な翻譯文學の出現 (五)劇文學の黎明

第五 文藝評論の成立と新詩歌の誕生(明治中期)……………二〇

(一)二大評論家の特質と其の論戰 (二)北村透谷の人生批評と大西操山の文明批評 (三)宗教界と學藝界とに於ける評論 (四)新體詩界の第一歩と新國文の興起

第六 ロマンチズム時代思想と文壇の主潮(明治中期)……………二四

(一)日清戰爭の文化的意義と新思想の勃興 (二)日本主義、世界主義、帝國主義の提唱 (三)道德倫理の研究と社會主義思潮の發生 (四)高山樗牛のニイチュヤズム (五)宗教熱と哲學熱の流行 (六)網島梁川の見神説

第七 小説界の新傾向と主要作家(明治中期)……………二六

(一)文藝批評家の要求と概念小説の流行 (二)悲劇小説の代表作家としての柳浪 (三)個性派の作家樋口一葉の作品 (四)鏡花の神祕主義と特殊の作風 (五)風葉と宙外及び新進諸家 (六)時代精神描破の要求と傾向小説 (七)紅葉の復活と露伴の一轉歩 (八)小説界の新機運と先覺者

第八 詩歌・戯曲を中心としての革新運動（明治中期）……………三〇〇

（一）新體詩界の情勢と劃期的詩作 （二）晚翠・泣菫・有明等の詩風 （三）短歌革新の運動 （四）俳句革新の運動 （五）劇文學革新と新しい劇作家 （六）翻譯文學及び文藝評論の進歩 （七）評論壇の諸問題と問題提出者 （八）特色ある雜文

第九 自然主義時代の思想及び評論（明治後期）……………二四五

（一）自然主義文學は何故起つたか （二）自然主義文學の特質 （三）自然主義の勃興を助けた評論家 （四）抱月の自然主義觀 （五）非自然主義者に對する自然主義の勝利 （六）自然主義の歸趨と文藝評論

第十 自然主義の作家及び作品（明治後期）……………二七三

（一）自然主義文學の先驅者としての獨歩 （二）島崎藤村の文學的飛躍 （三）田山花袋の自己革命 （四）秋聲・白鳥の自然主義的色彩 （五）風葉・青果・泡鳴及び新進作家の群 （六）象徵詩の新生及び自然主義と詩歌 （七）自然主義が戯曲に及ぼした影響

第十一 反動から更生への文學（明治後期）……………三〇五

（一）破壊後の新建設 （二）漱石・鴎外・虛子の小説 （三）ニオ・ロマンチズムの諸作家

第十二 改造期の文學(明治・大正時代)……………三八

(一)ヨーロッパの思潮及び文學の大勢 (二)新理想主義文學の代表者武者小路實篤 (三)有島武郎及び
其の他の人々 (四)小説界に於ける先進の人々 (五)新現實主義の文學と其の中堅 (六)評論壇の新
傾向と右傾左傾の二派 (七)初期のプロレタリア文學 (八)プロレタリア文學の根本原則 (九)プロ
レタリア文學の擡頭 (十)文學的進歩の第六期

第十三 プロレタリア文學の勃興(大正・昭和時代)……………三二

(一)プロレタリア文學の理論 (二)プロレタリア文學の中堅作家 (三)プロ派に轉向した既成作家
(四)プロレタリア派の文藝評論家 (五)プロレタリア文學の硬化 (六)農民文學とプロレタリア派

第十四 前期藝術派と後期藝術派、上(大正・昭和時代)……………三六

(一)新感覺派の出現 (二)新感覺派の人々 (三)前期藝術派の諸家 (四)自然主義系統の作家 (五)
ニオ・ロマン派と新理想主義系統について

第十五 前期藝術派と後期藝術派、下(大正・昭和時代)……………四〇

(一)大正後半期以來に於ける新現實主義諸家 (二)その後の志賀直哉と里見弴 (三)享樂派の人々そ

の他 (四)小説家としての山本有三 (五)日本的・東洋的な作品 (六)新興藝術派の活動と將來

第十六 大衆文學と通俗小説(大正・昭和時代)……………四一八

(一)大衆文學勃興の事情 (二)探偵小説の出現 (三)大衆文學是非 (四)大衆小説の中堅作家 (五)大衆小説の進展 (六)通俗小説の新展開 (七)通俗小説に於ける作家展望 (八)探偵小説の進路

第十七 大正後半期及び昭和の戯曲・韻文(大正 昭和時代)……………四二一

(一)演劇革新運動 (二)逍遙・綺堂・青果等の諸作 (三)吉藏・薫・國士其の他の作品 (四)山本有三及び劇壇有力諸家 (五)武者小路實篤及び主要劇作家 (六)大正時代の詩壇 (七)民主派と藝術派との對峙 (八)大正・昭和の短歌 (九)大正・昭和の俳句

第十八 文藝思潮及び評論(大正・昭和時代)……………四二三

(一)人道主義・新理想主義の思想 (二)英米的合理主義と修正派自然主義 (三)日本傳統主義とデモクラシイ (四)社會主義思潮とオリエンタリズム (五)日本中心主義の勃興 (六)日本中心主義の文藝 (七)反アメリカ主義その他

(附) 人名索引……………四二五

明治
大正
昭和
文學
講話

高須芳次郎著

第一 新文化の世紀及び新文學の世紀

(一) 新文化の源流と文學

新しい世紀は新しい文化を生み、新しい文化は新しい文學を生む。それは、新しい世紀の背景を爲すところの新しい思潮、氣分、情趣が必然、一個の主動力となつて、そこに時代の色彩を反映する特殊の文化を創造しなければ措かぬからである。フランス革命思潮と共に、ルソオの野の叫びが起つて、ロマンチズムの新文學が生れ、近代ドイツの新興につれて、クロプストックや、レッシングなどの新人が出現して、力強い國民文學の誕生を見たことなどは、明かにこれを證する。

明治から大正・昭和にかけての現代を私は假りに「新文化の世紀」と名付ける。凡そ外來文化の刺戟によつて、これほど文化現象が一新されたことは、奈良・平安時代を除いて、未だ曾てわが史上に例を見ないからである。それと同

時に、明治から大正・昭和へかけての文學時代を私は「新文學の世紀」と呼ぶ。凡そ異邦文化の影響を受けて、かくまでに文學の外形、内容を有意義に一新した時期は、在來餘り其の匹儔をわが國文學史上に見ないからである。それによつて、偉大な一つのエポックが作られ、文化史的に潑刺たる生彩多き場面を構成し得たのである。

さうした「新文化の世紀」に伴ふところの「新文學の世紀」は何によつて生れたか。それを知るには、先づ「新文化の世紀」を齎した原由を靜かに探求しなければならぬ。明治維新前に於ける江戸末期の時代はすべてが文化的に頽廢し、行詰つた狀態に陥つて居た。勿論、調子は低いが、然かも、傳統的惰性によつて江戸の風俗乃至浮世繪などには頽廢し切つた都會情調の色合が現はれて居て、そこに尙ほ一種のなつかしみある魅力を有して居たには違ひないが、清新、潑刺とした趣が、もう落日のやうに消え去つて居た。